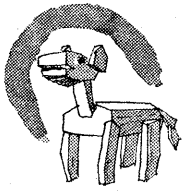
行為をのばす集団活動

―肢体不自由児の保育のために

武藤安子

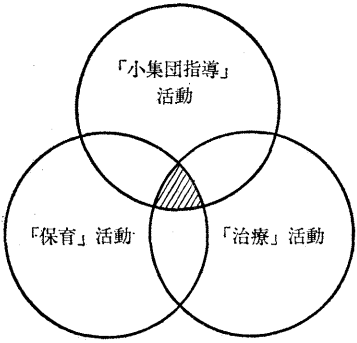


〈幼児の集団活動について〉

子ども（幼児）が、発達的、体験的意義をもとめて、あたらしい集団活動に参加する機会をもつ時、それは幼稚園、保育園であったり、小グループであったり、治療グループであったりするが、そこには「指導目標」というようなものがある。子ども（幼児）の集団活動を、指導目標のちがいによって分けるとすれば、次の三つがある。

保育活動は、一般に、幼児集団保育ということばと対応してとらえることができ、集団的課題に即した「保育目標」をもつ。治療活動は、医療が優先しての治療とは異なる意味の、児童臨床を基盤とする活動のことであり、子どもと他者（人、もの）との関係の発展に即した「治療目標」をもつ。

小集団指導活動は、子どもの自発的なあり方をのばしながら、その活動のめざす方向が操作される活動であり、操作技法に即した「小集団指導目標」がある。



指導目標は、子どもたちの、発達的、体験的必要性と指導者によってとらえられるところの、活動のめざす方向によって

規定されるか、ある場合には、三つの指導目標が同時に展開しながら、集団活動が行なわれることが必要である。

三つの指導目標が展開する中で、すなわち、三つの円の交差領域に対応する活動において、いわゆる肢体不自由児など、特殊な条件をそなえている子どもたちのいる集団活動のあり方を考えることが大切である。

＜子どもの活動における行為の意味＞

子どもの活動は、行為から成りたっている。子どもは、行為をとおして自己を表現し、他者を理解する。そして、行為するそのことが、子どもがのぞましい生活態度を身につけ、さらにあたらしくしていく過程でもある。

〝肢体不自由児〟といわれる子どもたちが、集団活動において問題になるとしたら、この行為の次元においてであろう。そこで、子どもの活動における行為の意味を考え、行為をのばす集団活動のあり方について考えたいと思う。

＜行為の可能性をのばす＞

「行為は、二つの基礎的な条件によって成立している。つまり、子どもの力と環境の条件である(1)」「行為が成立するための人（子ども）の力は、少なくとも人（子ども）がそれをすることが可能であるかどうか、および人（子ども）がそれをやろうとしているかどうかに依存している(2)」それをすることが可能かどうか、つまり、行為の可能性を規定する条件のひとつに、身体的条件（あるいは身体的能力）がある。

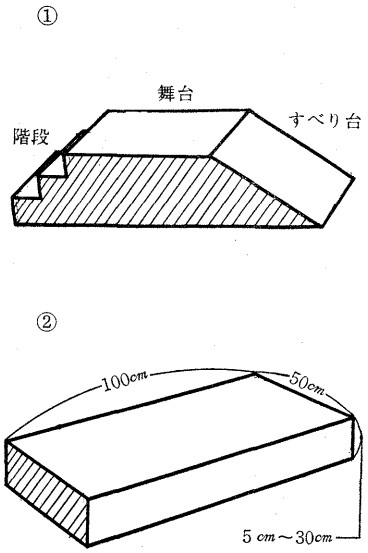
子どもの活動を、この身体的条件にとらわれた見方をすると、より速く、より遠く、より高く、より広くふるまうことが大切とされ、それにともなって、よくできるもの、できないものというような評価が、活動の中に生まれることになる。行為の可能性は、環境の条件や、まわりの働きかけなどが、その能力に適したものであるかどうかによって異なる。行為の可能性は環境の条件や働きかけの変化するものである。

しかし、それらの条件や働きかけがとらえにくかったり、能力を固定的なものとしてみると、行為の可能性は、低く、固定的なものとして評価され、あたかも、子ども全体の可能性についての評価のようにさえ、うけとられがちである。たとえば、肢体不自由児ということばがあるように。環境の条件や、まわりの働きかけの変化によって行為の可能性がのびていき、そのことが、身体

的条件や能力の発達を促進する、そのような集団活動が、用意されることがのぞましい。

・行為の可能性をのばすのに役だつと思われる用具（環境の条件）の例を、私の体験(3)の中からあげよう。

①は、歩行訓練用を目的とする設備である。舞台の上には、子どもが五、六人乗れる大きさのものであり、周囲には手すりがある。子どもの行為が、階段、舞台、すべり台と変化し、〃お山へいこう〃とか〃モノレールにのろう〃など、活動の目標にも通路にもなる。子どもが舞台の上で、動物になってウォーと呼びかけてみたり、集団に参加する気持が低い時に〃見ている場所〃になるなど、子どもの心理的世界を思うまま表現し、ふるまえる場所として、多く使われている。行為の可能への〃高さ〃の効用は、心理劇(4)における〃舞台〃の意味で実証されている。



②は、高さの異なる数個の木製の台であるが、その組み合わせや置き方によって、いろいろな活動を展開することができる。山型や谷型の階段のように並べて、①と同様の使い方もできる。室内に点在させておくと、お店やさんができたり、家や、活動の拠点になったりして、行為を通してのグループづくりに役だつことが多い。

〈体験をゆたかにする行為〉

行為することによって、子どもの生活体験はゆたかなものになる。ゆたかな生活体験は、子どもが、人、ものとの関係から成る、さまざまな生活場面（活動場面）において、どのような役割のはたし方をするかによって左右される。身体的条件にとらわれて、行為の可能性を固定的にみていると、役割のはたし方をも、固定的にとらえる傾向にある。たとえば、普通児の集団の中に、からだの不自由な子どもがいると、欠陥のある子どもとして、

〃同情〃したり、〃保護〃したりする考え方から、集団活動において、参加できる場面とできない場面とが決まってしまいがちである。

〃このゲームはとても無理だから見ていましょう〃とか、〃他の役割はできないけれど、この役割だったらできるから〃と、自分も他も認めた中での参加のしかたがどうしても多くなる。

そのような集団体験の中からは、子どもの行為の可能性を阻み、集団の中で、〃普通児〃と〃肢体不自由児〃を区別する考え方が育って、それがそのまま、社会関係にもちこまれるおそれがある。普通児とひとしく、集団活動に参加しながら、集団の発展を促進するのに必要な役割が、その活動に用意されていることが、基本的条件である。

その基本的条件がみたされた中で、肢体不自由児といわれる子どもたちにとって、どのような体験がつまれることが、のぞましいかというと、

・手をつかったり、足をつかったり、自分でからだをつかって行為することは楽しいことだという体験がたくさんあること。

・集団活動の中に、相互に働きかけることができて、しかも交代することが可能な役割が同時に用意されていること。たとえば、〃演じる人〃と〃みる人〃がいて、演じることができないから、〃みる人〃になるというのではなく、〃みる人〃の役割があることによって、〃演じる人〃の活動がたかまり、そのことが全体の集団活動を発展させる。

そのような役割のとり方をしたのち、役割が交代してみる人が演じる人になる。その場合、〃演じる人〃がどのような演じかたをしても、それをよいものとしてうけいれ、位置づけることのできるような、内容と指導のくふうが必要である。

・かなり課題がはっきりしたあそびにおいても、分化してとらえられる役割が、多く用意されていることがのぞましい。たとえば、「汽車ごっこ」の中に、汽車を動かす人、のる人、トンネルになる人、ふみきり番になる人、信号係、線路をなおす人、駅長さん、お弁当をつくる人、売る人など、どの子どもも、その子どものもつ特殊な条件や、集団における位置を生かして、活動に参加している。

そしてどのような行為も、その活動の発展に必要なひとつの役割として位置づけられていて、責任をもってその役割をはたすことの中で、ゆたかな生活経験が自分のものになるのである。

＜変革を促進する行為＞

体験された行為は、場面の変化や、方向を洞察することによって、新しい行為への可能性を生み出す。行為は、子ども自身の変革が実現されていく過程である。集団活動の中で、このことが大切にされ、実践されていくことが、子どもたち、ひいては社会における変革につながるものと考えられる。

・集団活動に用意された役割には、活動の発展を促進する役割、活動内容を豊富にする役割など、その役割が集団活動にはたす機能が種々ある。今、積木で高いビルディングをつくっている活動が行なわれているとする。身体的条件などによって、積木を高く積む活動には、促進する役割で参加することができにくい子どもでも、そのビルディングの窓々につり下げるさまざまな電気を色紙やクレヨンでつくる場面では、主体的に参加することができる。

このように、場面の変化に即応した役割がとれて、異なる参加体験ができることが、集団におけるその子どもの地位が固定することを防ぐであろう。

・活動量の多いゲームなどで、勝負を競うような場合、二、三人ずつのチームをつくり、チームとチームのぶつかりあいのような活動にすると、参加の可能性はたかまる。たとえば、「おにごっこ」のようなゲームを集団で展開しようとする場合、三人のチームを数組つくり、その中の一人の背中に、ハンカチをはさみこみ（あるいは、はちまきをして）それがとられたら負け、多くとった組が勝ち、のようなルールを定める。特殊な身体的条件をもつ子ども、アメーバのような動きをするチームの中にいて、自分の責任をまもりながら、チームの責任をもはたす。チームにおける活動で変革の体験はなされやすい場合がある。

〝肢体不自由児〟といわれる子どもたちの発達を促進する可能性を育てるために、普通児とひとしく、ともに保育される機会の、少しでも多くなることを、強くのぞむものである。

注(1)　「適応と変革」松村康平・板垣葉子共著より

(2)　「適応と変革」松村康平・板垣葉子共著より

(3)　日本肢体不自由児協会通園センターでは、はじめにのべた〝三つの円の交差領域に対応する集団活動の実践活動〟と技法の研究が、未熟ながらすすめられている。

(4)　「心理劇」松村康平著参照。

（日本肢体不自由児協会中央療育相談部）